

江戸後期の製鉄裏付ける

炉、ふいごの一部を発見

割沢遺跡 初の発掘調査



3号鍛冶炉を掘り下げ、さらに調査を進める作業員の皆さん

村の萩牛地内にある「割沢遺跡」の発掘調査が進んでいます。遺跡は江戸時代後期の鉄山跡で、当時200人以上が働いていたとされています。今回の調査で鍛冶に使った炉跡や、ふいごの一部など、当時の鉄作りをしのばせる遺構、遺物が見つかりました。村郷土史などでも紹介され、村特産品の「鉄山染」のルーツとなる割沢鉄山。その一部分ですが、約200年の眠りから今目覚めようとしています。

砂鉄が多く、水に恵まれた萩牛地区

盛岡藩直轄だった割沢鉄山は1814年から1829年までの間の12カ年、砂鉄の採掘や精錬などが行われたとい、江戸時代後期の「割沢鉄山雑書」や村郷土史などにその様子が記されています。ではなぜ、萩牛地区の割沢で鉄山が盛んになったのでしょうか。時は江戸時代後期になります。各藩は財政の悪化を打破する一つの方策として、新田開発を進めました。これに伴い、クワやトーガなどの農具が必要となり、鉄の需要は増大しました。村では砂鉄が多く、燃料となる豊かな森林に恵まれ、砂洗いに適した萩牛地区で鉄作りが始まりました。久慈地方でも鉄作りは行われ、農具やなべかまなど生活用品に多く使われました。

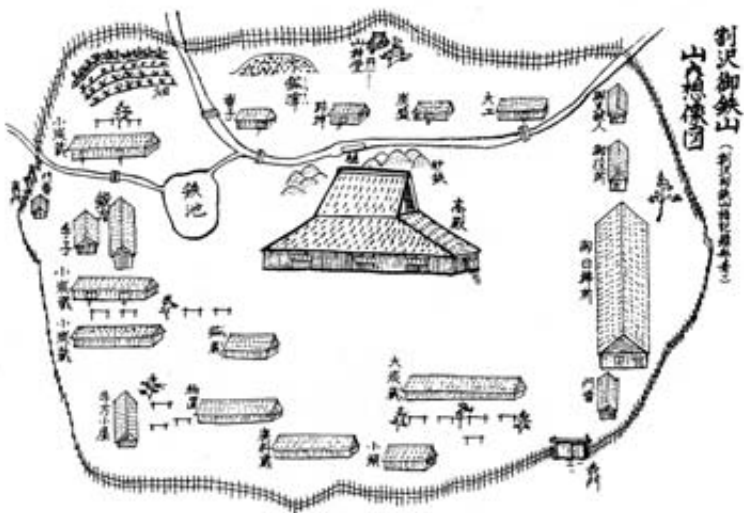
立地条件は夏涼しく、山深い場所

山林部での暮らしは、広大な森林はあるものの、小さな耕地、冷たい風が吹く短い夏は作物を育てることができず、農民は暮らしに困りました。鉄山はこれらの農民の働く場所として大きな意義を持ち、鉄山にたよる者が多くなってきたのです。

選ばれました。条件として夏涼しく、木が多く、砂鉄に近く、荷物の輸送に便利で、釜戸も近いことがあげられます。割沢鉄山は、役場から南南西約5kmに位置し、普代川の支流で地元の方々には「割沢川」と呼ばれる小さな川沿いの山間地に立地しています。

鉄山の用地(山内)

さらに、砂鉄も多く鉄作りにはまさに好条件でした。鉄山の用地(左上図)は垣杭で囲まれ表と裏に御門がありました。敷地内には、砂鉄から鉄を取り出す作業を行う高殿をはじめ、役所、支配人室、大工、炭盛、鍛冶炉、牛方屋などがあり、約300坪の面積に200人以上が生活していたとされています。



どの地層から、どんなものが出たか地層の構造を調べます



排さい場からはどんどん鉄かすが出てきました



鍛冶炉の写真撮影の様子

現場に集められた大量の鉄かすの山

「江戸時代の鉄山跡は貴重」



財団法人文化振興事業団 埋蔵文化財センター 北村忠昭調査員(33)

今回の調査で鉄かすが中コンテナ(30号×40号×20号)で490箱分、およそ18トンのものも出ています。規模からいってかなりのものですね。これから調査を進めればまだまだ出てくるでしょう。文献と発掘調査の結果を付き合わせることで、当時の鉄作りがどのようなものか分かってきます。江戸時代の鉄山調査は県内でも数が少なく貴重だと思います。

鉄作りは、はじめは山野の斜面に穴を掘り、自然の風を利用した簡単な炉でしたが、ふいごを使った野だたらと呼ばれる製鉄法に進歩しました。このころの農具や武器などの鉄器は、いまでも優れた製品として評価されています。

鉄かすなど大量に

このような記録は「文政9年割沢御鉄山雑書」(岩手大学付属図書館所蔵)などに記されています。今回の調査はその文献を裏付ける、非常に重要な役割を果たします。割沢遺跡の緊急発掘調査は、農用地総合整備事業下開

伊北区域の道路工事に伴うもので、3170平方メートルを対象に5月16日から行われています。割沢遺跡からは、これまで鍛冶炉4基、炉の上屋とみられる建物跡、鉄かすを流す排さい場が発見されたほか、土製のふいごの送風口「羽口」や鉄かす、鉄を鍛える際に飛び散った鍛造剥片などが大量に出土しています。

遺構や出土品から、今回の発掘調査は炉から出された鉄の塊をもう一度熱し、不純物を取り除いて延鉄を作る「大鍛冶」が行われていたとみられています。

(次ページへ)